

CS01-4 医療現場からみた薬剤疫学教育の必要性

○政田 幹夫¹，中村 敏明¹

¹福井大病院薬

数々の大規模臨床試験やそれらを集大成したガイドラインの策定など、**EBM** を実践する環境は整ってきたと言える。一方で、無作為化比較試験のようにエビデンスレベルの高い手法で行われた臨床研究の結果は、無条件に受け入れられがちで、断片から全体を推し量ってしまうリスクに気づかずに適用してしまっているケースも見受けられる。いかなるエビデンスも全ての事例において真実を示しているわけではない。現在直面している症例に適用することの妥当性、適用した際に期待される効果の大きさなどを適切に判断する能力が要求される。**EBM** の実践には、エビデンスを使いこなすだけでなく、つくり、つたえることも必要である。適用可能なエビデンスがない場合には、問題解決のための試験計画を立て、エビデンスを自らつくり、学会発表や論文投稿によってエビデンスを伝えていくためには薬剤疫学の知識、技能が不可欠であり、これからの薬剤師に求められるスキルである。

臨床においては、時間をリセットしてやり直すことができない。薬剤師は、未来に得られる結果を治療開始前に予測し、その時点において最善と考える選択ができるように医療をサポートしなくてはならない。洪水のごとく溢れかえる情報を取捨選択し、適正に評価し、個々の医療に適用するためには、従来の医薬品情報の収集、管理といった能力に加え、エビデンスに基づく医療を心掛け、エビデンスの落とし穴に陥らないように薬剤疫学の知識、技能を習得する必要がある。